

# 不登校児の教育相談に関する一考察

- 母子分離ができなくなった女兒との遊戯療法 -

研修員 高木幸子

## 1 研究の趣旨

不登校の子どもたちが持つ背景には、学校・家庭（家族）・地域社会の抱える問題など、様々な要因が潜んでいる。子どもたちは、不登校という状態を呈しながら、様々な心の叫びや訴えを、親や教師など、まわりの大人に投げかけていると考えられる。その背景の一つに母子関係の課題がある。担当した相談の中でも、母親との情緒的な結びつきの不確かさから、何かをきっかけに自分の存在や対人関係での根底的不安を呼び起こし、それが一つの要因となって不登校など、学校不適応を起こしているのではないかと思われる子どもに出会うことが多かった。そこで、本研究では、母子関係に視点を当て、それが子どもの成長と人格形成にどんな意味を持つのか、ある失敗をきっかけに母子分離不安を起こし、登校できなくなった子どもの事例をもとに、遊戯療法でのプロセスを追いながら考察を行った。

## 2 研究の内容

### (1) 乳幼児期の発達課題と母子関係について

子どもの人格形成において、乳幼児期の母子関係が重要な意味を持つといわれている。子どもの成長にとって、母親との関係がどんな意味を持つのか、乳幼児期の発達課題から考えた。

ア 「基本的信頼感」の獲得《乳児期》；身体的な不快感や欲求を、愛情豊かに満たしてもらうことで、自分が受け入れられているという安心感を持ち、「基本的信頼感」（エリクソン）が形成される。それがベースとなり、安定した対人関係を結んでいくことができる。

イ 「自律性」の獲得《幼児期早期》；歩行と言語によるコミュニケーションの手段を用いて、絶対に依存していた母親のもとを離れ、ひとりだちを始めるが、現実生活への適応のためには、自分で自分を律することも学んでいかなくてはならない。この頃、排泄訓練など、情緒的な結びつきを大事にした適切なしつけを通じて、自律性が培われていく。

ウ 「分離個体化」《幼児期前期》；マラーは「分化期」「練習期」「再接近期」「個体化期」の4段階に分けて、分離個体化の過程を論じた。母親の愛情に満たされ、健全な分離個体化がはかられることによって、恒常的な情緒の安定基盤が作られる。

### (2) 研究事例

< うんちを漏らした失敗をきっかけに、母子分離不安を起こし、不登校になったA子(小1)との遊戯療法 >

ア 相談の経過と考察《第 期～第 期、22回のセッション》

第 期、母親と離れられなかったA子は、Th（筆者）を試しながら関係づくりを行い、母子分離して遊ぶようになる。第 期では、攻撃性を出しながら、Thとの関係を整え、これから繰り広げようとするドラマのステージづくりを行った。そして、第 期、A子は象徴的な遊びを通して、心の中に安心基地を築き、「うんち」にかかわる傷つき体験を表出しながら、自我の確立をはかっていく。新しい自分を誕生させたA子は、第 期、修復してきた万能感を確かめながら、現実世界へ踏み出していった。

## 3 研究のまとめ

甘えたい気持ちを心の中に押しとどめ、母子関係において、基本的な信頼感を築けないまま育ってきたA子は、大人から見た「よい子」としての自分に身を委ね、弱い自己像を守ってきた。原初的な不安に重なる失敗を経験し、そのままの自分を演じ続けることができなくなった彼女は、その不安を不登校という形で訴える。やっと、「淋しさ」に気づいてもらうサインが出せたのであろう。A子は、母親への甘え直しをし、プレイの中で内的世界を象徴的に表現しながら、新しい自己像を統合していった。A子の感受性、内的世界の豊かさに、毎回新鮮な発見をし、子どもの持つ可能性のすばらしさを実感した事例である。彼女との出会いを心のベースに、今後さらに研鑽を積んで、子どもたちと出会っていきたいと思う。

